

令和 6 年 8 月 30 日現在

機関番号：26401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2023

課題番号：19K24208

研究課題名（和文）慢性疾患患者を支える外来看護師のアセスメント能力を育成する教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of an educational program to develop assessment skills of outpatient nurses supporting chronic illness patients

研究代表者

竹中 英利子 (Takenaka, Eriko)

高知県立大学・看護学部・助教

研究者番号：20849814

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、外来看護師が、慢性疾患で通院する多数の患者の中から、看護介入の必要性が高い患者を捉え、優先的に看護介入を行うための判断能力を育成するための教育プログラムの開発にむけて取り組んだ。

外来看護師が慢性疾患で通院する多数の患者の中から、看護介入の必要性の高い患者を捉えるために行っているアセスメントと、アセスメントに必要であった知識、技術を明らかにした。その中から「自分自身の看護を振り返り今後につなげる力」「周囲の専門職種への介入を自分自身の看護に取り入れる力」に着目し、教育プログラムを検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外来看護師が慢性疾患で通院する多数の外來患者の中から、看護介入の必要性の高い患者を捉えるためのアセスメント能力を育成する教育プログラムの開発により、患者はタイムリーに必要な看護介入を受けることができる。そして、治療が継続され、病状だけでなく、心理社会的にも安定した状態で住み慣れた地域で生活できると考える。

また、外来看護師は、他看護師のアセスメントや看護や看護の工夫を知る機会を持つことができる。そして、看護の専門性の自覚と自信を得ることで、さらなる外来看護の向上につながると考える。また、看護師の教育担当者は、外来看護師の能力育成の視点が明確となり、教育に取り組みやすくなると考える。

研究成果の概要（英文）： In this study, I worked to develop an educational program to help outpatient nurses to develop the judgment ability to identify patients with a high need for nursing intervention from among the large number of patients attending the hospital with chronic illnesses and to prioritize nursing intervention for them.

I identified the assessments that outpatient nurses perform to identify patients who are in high need of nursing intervention from among the many patients who attend the hospital with chronic illnesses, and the knowledge and skills that were necessary for the assessments. From this, I focused on the "The ability to reflect on one's own nursing and connect it to the future" and "The ability to incorporate interventions from surrounding professionals into own nursing care," and considered an educational program.

研究分野：在宅看護

キーワード：外来看護 慢性疾患

## 1. 研究開始当初の背景

現在、日本では、生活習慣病などの慢性疾患をもつ人が増加している(厚生労働省,2010)。慢性疾患の治療の特徴として、藤田(2014)は、症状と障害の程度に応じて療養の場(病棟-外来-在宅)を選択することが必要であり、近年外来で治療を受ける人が増加していること、多くの人は外来通院しながら在宅において療養していることをあげている。さらに、在宅療養を支援するための体制の充実など治療・療養環境の場を整える必要性を述べている。これらのことから、慢性疾患で在宅療養を行う患者を支えるために、外来は重要な場であり、外来看護の充実が求められていると考える。

数間(2017)は、外来で提供される看護の内容として「病態生理にもとづく各分野の身体管理技術の提供」「心理的適応の促進」「社会資源の紹介・導入(負担の軽減)」をあげている。川添(2018)は外来看護に求められるものとして、「医療ニーズの高い患者・家族のセルフケアを獲得するための支援」「在宅での療養生活を支援する多職種との連携」をあげている。これらのように、外来看護には多くの役割が求められている。しかし、外来の看護師配置基準は30対1となっており(厚生労働省,2007)、少ない人数で多くの業務に追われ、患者と向き合う時間が取りにくいことが考えられる。武知ら(2017)は、「外来では多数の受診患者全員に看護師がかかわることは難しい。看護の働きかけが必要な要援助者に継続的にかかわるためには、患者を捉えるためのさまざまな工夫が必要である」と述べている。

外来看護師による看護介入の必要性の判断について、久留嶋ら(2008)は、外来看護師は看護介入動機をつかみ、さらに情報収集、アセスメントを行っていることを明らかにしている。高橋ら(2018)は、診療科によらず、介入すべきかどうか判断するポイントは同じであり、判断のスキルは外来を経験しなければ磨かれないと述べている。

そこで、外来看護師が慢性疾患で通院する多数の外来患者の中から、看護介入の必要性の高い患者を捉えるためのアセスメント能力を育成する教育プログラムを開発することで、これまで外来経験によって培われてきた看護介入の必要性の高い患者を捉えるために必要なアセスメント能力や知識、技術を計画的に習得することができると考えた。その結果、患者はタイムリーに必要な看護介入を受けることができ、治療が継続され、病状だけでなく、心理社会的にも安定した状態で住み慣れた地域で生活することができると考える。また、外来看護師は、他看護師のアセスメントや看護や看護の工夫を知る機会を持つことができる。そして、看護の専門性の自覚と自信を得ることで、さらなる外来看護の向上につながると考える。看護師の教育担当者は、外来看護師の能力育成の視点が明確となり、教育に取り組みやすくなると考える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、外来看護師が慢性疾患で通院する多数の外来患者の中から看護介入の必要性の高い患者を捉え、看護介入を行う、そのアセスメント能力を育成するための教育プログラムを開発することである。そのために、以下の4つの研究目標をあげた。

研究目標1)外来看護師は、慢性疾患で通院する多数の患者の中から、看護介入の必要性を判断するために、どのような情報をどう収集し、どのようにアセスメントしているのかを明らかにする。

研究目標2)研究目標1)で明らかになった情報と収集方法、アセスメントに必要であった知識、技術を明らかにする。

研究目標3)外来看護師のアセスメント能力を育成するための教育プログラムを開発し、洗練化する。

研究目標4)教育プログラムの効果を検証する。

## 3. 研究の方法

### 1)研究目標1および2

高知県立大学看護研究倫理審査委員会の承認を得て、外来経験3年以上の外来看護師20名を対象に、半構成的インタビューガイドに基づき面接調査を行った。得られたデータから看護介入の必要性の高い患者を捉えるためのアセスメントと思われる部分をコード化し、質的に分析した。また、アセスメントに必要であった知識技術についてもカテゴリー化した。

### 2)研究目標3および4

1)の結果より、外来看護師のアセスメント能力を育成するための教育プログラムを検討した。

## 4. 研究成果

### 1)研究目標1

分析の結果、看護介入の必要性の高い患者を捉えるためのアセスメントとして、以下の13カテゴリーが明らかになった。

看護介入の必要性の高い患者を捉えるためのアセスメント
長期間通院しながら療養する患者の個別性を把握する
看護の経験から判断基準をもつ
多職種と連携して情報を集める
直接対応して患者の状況を把握する
検査データから身体状況を判断する
経過から患者の変化を予測する
緊急対応の必要性を判断する
生活者である患者と家族の自宅での療養生活を想像する
生活と病状を関連づける
治療継続ができるか見極める
必要な介入を考案する
生活を支える看護師としての向上を目指す
患者と関わるために外来の環境を調整する

## 2) 研究目標 2

看護介入の必要性の高い患者を捉えるためのアセスメントに必要であった知識、技術として、以下の13のカテゴリーが明らかになった。

看護介入の必要性の高い患者を捉えるためのアセスメントに必要であった知識・技術
緊急性の高い状態の知識
身体の状態を把握する技術
担当する外来で対応する疾患や治療に対する知識
認知症に関する知識
高齢者に関する知識
自宅での生活に目を向ける意識
生活と病状が関連しているという実感
継続看護の必要性の学び
地域や病院の情報
患者と関係性を構築し維持する技術
看護師同士や他職種と連携する技術
患者の状態が改善した経験に基づく自信
周囲の専門職種の介入を自分自身の看護に取り入れる力
自分自身の看護を振り返り今後につなげる力

## 3) 教育プログラムの開発

1) 2)の結果より、外来看護師のアセスメント能力の育成のための教育プログラムとして、外来看護ケア検討会の開催により、事例提供や意見交換により、自己または他者の経験を振り返り、新たな知識や技術を身につけることができるのではないかと考えた。

今後は、ケア検討会を実施し、ケア検討会のエキスパートからアドバイスを受けながら、より効果の高いプログラムを目指す必要がある。

## 引用文献

藤田佐和.(2014). 章慢性期看護の考え方, 3 慢性疾患治療の特徴. 鈴木志津枝, 藤田佐和(編集), 慢性期看護論 (pp.16-21). ニューヴェルヒロカワ.

川添恵理子.(2018). 地域包括ケア時代に外来看護で求められる能力. 看護, Vol.70, No.1, pp.71-75.

数間恵子(編著).(2017). The 外来看護 - 時代を超えて求められる患者支援(pp.138-139). 日本看護協会出版会.

厚生労働省(2007). 医療法に基づく人員配置標準について 資料2.  
<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/03/dl/s0323-9b.pdf>

厚生労働省(2010). 医療提供体制を取りまく現状等について.  
<https://www.mhlw.go.jp/content/12404000/000493996.pdf>

久留嶋尚子, 上月由紀子, 習田知子(2008). 外来における看護介入動悸を探る-外来看護師の思考・行動課程を概念化して-. 西脇市立西脇市民病院誌, 8号, pp.37-41.

高橋文子, 阿部麻由美, 竹下花江, 海保亜紀子(2018). 私たちが外来看護に夢中になる理由(特集 変わる外来看護 「2025年に向けて看護ができること」). 看護展望, 3月増刊号, pp.16-25.

武知幸子, 今野里美.(2017). 第5部 1 看護の専門性を発揮して患者の生活を支える-杏林大学医学部附属病院. 数間恵子(編著), The 外来看護 - 時代を超えて求められる患者支援(pp.172-183). 日本看護協会出版会.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 竹中英利子, 川上理子, 森下幸子
2. 発表標題 慢性疾患患者を支える外来看護師のアセスメントー看護介入の必要性の高い患者を捉えるー
3. 学会等名 第29回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	川上 理子  (Kawakami Michiko)		
研究協力者	森下 幸子  (Morishita Sachiko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------